

牧師室から (2020.9.13)

ある日、教会の庭から見える青空が美しかった。珍しいほど雲が一点もなく綺麗な青色が広がっていた。その青空を見ながら思い浮かんだことがある。

お見舞いをしに行った病院から出て、ふっと上に目を向けると、その時も同じような青空が広がっていた。私は夢中になって頭を後ろにしたまま、しばらく足を止めていた記憶がある。見舞った彼女は喉に威圧感を感じ、検査をしたところ、腫瘍ができていて手術をした。大した手術ではないと思ったが、なぜか入院が長引くことになった。

彼女は韓国から娘家族を連れて、一人親戚を頼りに日本に来たが、苦労の連続であった。娘家族を支えるため、七十才近くの体で居酒屋の厨房で働いていた。綺麗な身なりと上品な言葉使いには、過酷な生活が少しも感じられなかった。夜遅くまで働いていたのにもかかわらず、主日には必ず礼拝に来た。また、何か美味しいものがあると、ちょっと寄ってもいいですか、と言って、私のところに時々持って来てくださって、しばらくの間だったが、いろいろ身の上話を聞かせてくださった。私は神学校を卒業したばかりで、在日韓国人の教会で伝道師として働き始めた時で、彼女の優しさに、かえって私の方が支えられたような気がする。

幸いに彼女は快復し、教会に来ることが出来た。その時に、「こんなに声を出して讃美歌を歌い、祈りができることがいかに感謝であるか、以前には分からなかったです」と満面の笑顔で言っていた。

私も2年前に手術を受けて6階の病室の窓から、自転車で道を通る人、スーパーに入りをする人々を見ながら、その日常があまりにも羨ましかった。

最近退院なさった方のメールに書かれていたが、ご自宅でお風呂に入り、奥様との何の変哲もない昼食、それに対して「いいものですね」と、おっしゃる中にさりげなく伝わる日常の有難さがある。

私たちの平凡な生活、当然と思われることがいかに大事なことであるのか、いかに大きな恵みであるのかは、失ったことがある人のみが知ることができる。

若い時は分からなかった、当たり前のように見えたものの大事さが身に染みるこの頃である。

(鈴木善姫牧師)